

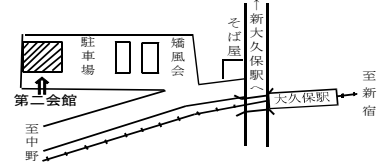


# ろば

## 百人町教会

集會案内

礼 拜：毎週日曜 午前10時半  
 於 矯風会第二会館1階  
 聖書研究会：第1・3水曜 午後7時半  
 於 阿蘇 宅  
 TEL 03-3333-5002  
 連絡先：〒112-0002 東京都文京区  
 小石川2-9-4 賈 晶淳 方  
 TEL/FAX 03-3817-7277  
<http://www2.ocn.ne.jp/~church/>  
 郵便振替口座：00180-8-565379



### 私の目線 (二五)

「あの人はここに！」

妻 宣惠

悩み続けてどん底に落ちた時

一緒に歌ってくれた。

喜びの絶頂にあった時

一緒に踊ってくれた。

孤独に耐えられなかった時

一緒に食卓を囲んでくれた。

私の手料理を「おいしい！」と言って。

私がひもじかった時

いちじくをもらってくれた。

のどがかわいている時

水を飲ませてくれた。

そして病の床に伏していた時

手を握って祈ってくれた。

その時、私の病は癒されました。

あの人の手の温もりを

私は忘れない。

それは今も私の支えです。

あの人はどこに？

そう、あの人はここに！

二〇〇〇年経った今も、

私の隣に！

私が一番辛かった時

あの人は一緒に居てくれた。

迷って苦しんでいた時

話を聞いてくれた。

涙が止まらなかった時

肩を貸してくれた。

この詩は「まな」でお姉さまが亡くなられたという方とお話ししながら、私の父が亡くなった時も同じだったという思いが重なり、出来たものです。きつと、イエスが亡くなった時の弟子たち、友人たちも似たような思いだったかもしれません。そしてあなたの大切な方が亡くなられた時も…

## 権力と創造神話

## 創世記二・四―二五

賈 晶淳

人は自分が何処から来たのかという問いは古代からの関心事であったと思います。そのため創造に関する神話や伝説のようなものは共同体的アイデンティティを提供するものにもなります。自らの家系がどこから発生し、どのように形成されて来たのかを問うことは自らのアイデンティティの形成や確認をすることに繋がるものです。そして、神話や伝説は国家権力の根拠作りや宗教における信仰の基準にもなることも多くあります。例えば、古事記や日本書紀における神話が天皇制の根拠作りのようなものでもあれば、旧約聖書における創造物語はアメリカの社会の中で進化論と創造論という形で対立の原因にもなるのです。

その宇宙や人類の創造に関する働きと記憶とは有史以前のことでありますし、その文字化は有史以来の作業です。従って、それらを信じるか信じないかの問題でもありますが、それよりそれらが必要に応じて造られたものも多くあります。例えば、殆どの人の家系を遡って行きますとどこかの偉い人や王の子孫にあたることなどです。ですから殆どの人はどの馬の骨かではなくちゃんとした偉大なる人物の子孫や王孫ということになります。しかし、世の中には更にその先を追及しているものがあります。それは権力者を標榜する者であり、そのシステムです。彼らは首領、王、皇帝のような肩書きを

持つていますが、彼らの権力の背景には必ず民の存在があります。民なしの君主はいません。民あつての君主です。しかし、彼らはそれを認めるわけには行きません。そこで多くの場合は権力の形成を神話と結びつけ、自らの権威や権力が神と直結するものであるようにでっち上げられています。

こういった観点から次に申し上げる二つの創造に関する神話について考えてみたいと思います。一つは旧約聖書における創造に関する物語です。もう一つは古事記や日本書紀に書かれている神話です。

まず創世記の内容ですが、創世記における一章と二章四節以下の二つの創造に関する物語の内容は少々異なるものですが、日本の神話に比べますとはっきりと浮かぶものがあります。創造者と被造物の位置の問題です。つまりその位置付けが同等なるものか異なるものかという問題です。旧約聖書における内容は基本的には創造者と被造物の位置は異なるものであるものに一致しています。簡単に申しますと人間を含む地上の全ての生き物は神によつて創られたという考えです。それに比べますと、古事記や日本書紀の神話には人間の始まりについて書かれていません。その神話のテーマは天皇を神々の子孫に繋げるということですが、従って、そこには創造者と被造物という設定はありません。そのため天皇が現人神として国家を支配する存在として位置付けられているのです。

その違いは何を意味するのでしょうか。その

理解のためには先ほどの話にもどらなければなりません。創造物語や神話の形成理由の一断面に過ぎないことを前提にしての話ですが、権力維持という面からの考察です。特に人類における支配の歴史と信仰の歴史は集団形成と重なるものですので、その始まりは殆ど変わらないものではないかと推測します。そして、その集団が大きく国家や宗教が形成されます。それによつてより大きな権力が形成されるようになります。その時にもっとも理想的な権力形成とは両方の頂点に同時に立つことではないかと思えます。それは人類史のありとあらゆる時期に見ることができると思います。そのようなところから考えますと古事記や日本書紀の内容は割と普通のことです。それが成功した事例にもなることでしょう。そういった意味で二つの創造に関する神話が書かれた状況を考えますと、旧約聖書の場合は権力が非常に不安定な状況で書かれたもので、後者は権力が割と安定した状況で書かれたものではないかと思うのは間違いないでしょうか。

しかし、権力維持というのはそれほど簡単なものではなかったのです。ソロモン王の場合を考えてみます。ソロモン王の権力形成過程において神権政治への志向性を持っていました。ソロモン王は世襲によつてダビデ王朝を作り上げました。そして神殿の建設やそれに伴って祭司等を任命する組織作りをします。更に彼はダビデ王朝に関するイデオロギーをつくり出します。そして国家や宗教の両方における権力の頂点に立つとしたのではないのでしょうか。旧約聖書に

おける創造に関する物語がもし当時に創られたとしたら、その辺から考えますと非常に面白く読まれると思います。実際、そのように考えている聖書学者もいます。もしそうであった場合はこの創造に関する神話の内容をめぐって宮廷や神殿の中のイデオログたちは惨憺たる争いを繰り広げたのではないかと思えます。片方は権力と王朝を永遠なるものとして築き上げる作業が行われ、片方はそれを相対化しようとする動きがあったのでしよう。ダビデ王朝からメシヤが誕生するなどのイデオロギーはダビデ王朝が神に繋がることを間接的に言っている部分です。しかし、結果から申しますとソロモンが導く権力側が負けたのではないのでしょうか。つまり、ソロモンイコール神ではなく、ソロモンもあくまで神の被造物であるという神学が勝ったのです。それが意味するのは非常に大きな事と考えられます。

このような理解に関する裏づけは、ソロモン王の死後に起った王国の南と北の分裂です（BC九二六年）。それは今から考えますと一種のクーデターであり、革命でもありました。その時のやり取りについては列王記上二章四節〜四節に書かれてあります。その一部をご紹介しますと、四節に民側が「あなたの父上はわたしたちに苛酷な軛を負わせました。今、あなたの父上がわたしたちに課した苛酷な労働、重い軛を軽くしてください。そうすれば、わたしたちはあなたにお仕えいたします。」と要求します。それに対して宮廷側からは二つの反応があります

が一つは、七節の「もしあなたが今日この民の僕となり、彼らに仕えてその求めに応じ、優しい言葉をかけるなら、彼らはいつまでもあなたに仕えるはずです。」という反応と、十節以下で「わたしの小指は父の腰より太い。父がお前たちに重い軛を負わせたのだから、わたしは更にそれを重くする。父がお前たちを鞭で懲らしめたのだから、わたしはさそりで懲らしめる。」という反応がありました。

このように旧約聖書における創造に関する物語を考えて見ますと、創造者と被造物の位置付けが異なることによつて発生するのは永遠な権力形成は出来ないということと、つまり幾ら絶対なる権力の持ち主でも神の前では一被造物に過ぎないという神学です。それは権力者はいつでも変えられる存在であることを示しているものでしょう。そして権力者は常に神の声を民から聞かなければならないということでしょう。

専門家ではありませんので正しい言い方ではないかも知れませんが、天皇制を支える神道にはキリスト教で言う正義という思想、儒教における仁や義という徳目がどうもはつきり見えません。それは常に神が目の前に存在するため要らなかったのではないかと思えます。それらは神によつて現れたものであり、それらをもつて天の下に存在する全てのものの正邪を判断するのです。しかし、天皇が神である場合はそのようなものは要らない。天皇によつて語られるのが常に徳目になるわけです。特に戦時中は教育勅語に対して絶対の敬意を要求されました。江

戸時代を含む時代に天皇が明治維新以後のような絶対的な権力を持つていなかったとしても、天皇が神とつながっているという神道思想は階層を分け、権力の集中を促し、その持続性を保つ働きを盛んにして来たと思えます。

古事記や日本書紀が書かれた年代から見ますと旧約聖書が書かれた紀元前という時期は神話の時代になります。しかし、どの時代にも人間は権力の争いを繰り広げたことになりました。それは有史以前の場合でも人々が集まったころでは常に権力の争いがあったというのが想像できます。普遍性と言いましようか、今日でもまったく変わっていないものです。しかし、今は殆どの集団の権力システムが交代するようになっていきます。幾ら優れた神話を持つたとしても人間を力で支配しようとしていた殆どの王朝が歴史から消えて行きました。勿論王朝が滅びるというのは神話も消滅します。しかし、これまで変わっていないと言っている、そしてこれからも変わらないと考えているシステムが天皇制です。変わらない面から見ますとそれは非常に安定したシステムで、国民に変化という不安を与えない、優れたシステムかも知れません。戦後六〇年の殆どの時期を自民党がリードしてきたのもこのような天皇制による国民的心性が作用したかも知れません。その天皇制が戦後象徴天皇制に変えられ、天皇が人間宣言もしましたが、今度は男子が生まれえない現実の中で女帝を認めることで万世一系の皇統を守ろうとしています。（一月三〇日の証詞より）

## 一五年間で身も心も成長した!?

小林 明

東京を離れる。故郷に戻ることに關して何か書いてほしいと本誌委員会から言われました。ただ大阪に帰ってこれから実家の居酒屋のお手伝いをしながら伝道師をしていく。それだけでなく、居酒屋で働きながら伝道師が務まるかどうか?それはやってみたいと分からないと思います。

四月からお世話になる大阪生野教会の方々とお大阪教区の皆様に支えていただきながらここまで出来るかやってみたいと考えています。

## 東京に来た頃

百人町教会には、東京に来た年一九八九年の八月三日に初めて来ました。その時は日本キリスト教婦人矯風会のヘルプのスタッフをしていた青木恵美子さんに連れられて礼拝に出席しました。その時から一五年と半年になります。長かったような短かったような。非常に楽しい教会生活を送れたことを感謝します。

僕が東京に出てきたのは、日本映画学校に通うためでした。高校を卒業して大阪の写真スタジオで働いていた僕は、映画やテレビの動画の撮影をしてみたいと思っていました。映画学校には日本映画の全盛期時代の監督やスタッフが教師や講師をしておりました。学校と言いつても現場中心の仕事ですから、学生をしながら既に撮影現場の仕事をしている友人もいました。十六ミリや三五ミリ映画のカメラ、アフレ

ックスやミツチェルなどの映画用カメラにフィルムを装填し、電源のスイッチを入れ「よい。スタート」のカチンコの音は何とも言えない。緊張の高まる気持ち良さでした。

校長である今村昌平監督がドキュメンタリー重視ということもあり、記録映画、ドキュメンタリー映画をたくさん学校で観ることが出来ました。障害の重い方々を撮った作品、部落差別解放を描いた映画、在日の方々の記録、三里塚の小川伸介作品や水俣病の土本典昭作品、その他動物モノや自然科学モノなどの優秀な作品を観る事が出来ました。

その頃の百人町教会の中心的話題は「渡り鳥企業」と言われた韓国スミダやアジアスワニーの現地韓国工場閉鎖問題や従業員解雇問題などでした。韓国から若い組合員の方々が来日し日本の親会社に抗議行動を起こしていました。労働組合の集会からシュプレヒコールまで僕は全く知らなかったのが本当に驚きました。今まで見たことも聞いたこともなかった。大阪にいたときは見えてこなかった色々な事に気が付き始めました。その後、昭和天皇のXデーについて社会的問題が湧き起こり、弓削達フェリス女学院院長宅に銃弾が打ち込まれるような事件がおこった。(その弓削先生が現在は小泉首相・石原都知事靖国参拝違憲訴訟の会の原告代表となっている)。百人町教会の教会員も様々な抗議行動を起こしたが一日ハンガーストライキを行ったり早稲田教会で行われた天皇代替わり反対集會に参加したりしていた。

## 映画の仕事

そういう事もあって、僕が日本映画学校を卒業する時はドキュメンタリー映画の仕事をしたと考えるようになっていた。そして「ゆきゆきて、神軍」を完成させて五年目の疾走プロダクションに撮影助手として参加した。原一男監督作品である「全身小説家」(主人公…井上光晴氏)の映画に三年半かかり完成させた。当初五人いたスタッフは一人づつ辞めていき九三年の完成時には僕と監督とプロデューサーだけが撮影時からのスタッフだった。大変しんどかった。

その間「全身小説家」が完成する間に「七三一部隊展」の企画制作が行われ、九四年に全国で展示会が行われ大成功を収めた。それから「教えられなかった戦争・フィリピン編」の撮影のためにフィリピンに二ヶ月近く滞在する事も出来た。九五年は阪神大震災がおこった。また百人町教会の青年会のリーダーであった小坂仰氏が亡くなった。百人町教会では色々考えたり、惜しんだりした年であった。ただ「フィリピン編」の上映も成功したり「全身小説家」もキネマ旬報の賞を貰ったりした。

その後僕は自分で自主制作の映画を作ろうと考え「有機農法」の映画や「国松長官(警察庁)狙撃事件」をテーマにした映画を作ろうとしたが、中々うまく行かなかった。九八年に「教えられなかった戦争・沖繩編」の撮影の為に、沖繩県伊江島に約一週間滞在し阿波根昌鴻さんの語りを毎日撮影することが出来た。沖繩に初めて行ったのが阿波根さんの撮影であった。現在

は年に二〜三回行くような沖縄好きになってしまった。

### 農村伝道神学校入学

九九年に新ガイドライン、国旗国歌法、盗聴法などが国会で審議されるようになり、日本基督教団靖国天皇制問題情報センターへ「国旗国歌法」の反対運動くらい何かやらないのか？と訴えたら、「君がやりなさい」と言われ「日の丸・君が代NO！通信」をPCで毎週発行することになった（大変誤字の多いニュースで当時購入していただいた方には本当に申し訳ございませんでした）。その後月一回発行のニュースに替わり、現在も発送し続けています。日の丸・君が代反対運動や新ガイドライン法反対運動を通して農村伝道神学校の学生達と仲良くなり二〇〇〇年四月に農伝に入る事になった。入学した年に沖縄サミットがあり沖縄に約三週間滞在し、クリントン米大統領の「平和の礎訪問」を反対したり米軍基地反対運動をしたりした。

翌年〇一年八月一三日に小泉首相が靖国神社に参拝した。その後全国六箇所で開催が行われることになり、東京は十二月に提訴した。六カ所（大阪、四国、九州・山口、千葉、東京、沖縄）の原告は日本人、在日外国人、在韓韓国人、台湾人の約二〇〇〇人が原告になり裁判闘争をしています。先日〇五年三月三日に行なわれた靖国神社の抗議と国会衆院第二会館の院内集会に來られた中谷康子さんが「あの頃（自衛官合祀拒否訴訟）に比べ、こんなに多くの人達が共

に闘う様になった。ゆっくりゆっくり運動は拡がっています。」と語っていましたが、政教分離訴訟の闘いを印象付けた裁判「戦死者を褒め称え、国家が戦争で亡くなった人を弔う行為をしてはいけない！」という事を印象づけることができたのが、この靖国参拝違憲訴訟だと思います（僕は東京訴訟の事務局スタッフをしています）。

もう一つ、キリスト者平和ネットでイラク攻撃前（〇三年春）にアメリカ大使館前で「キリスト者平和ネット」の旗を持って立っていた時、当日前半立っていた西原美香子NCC幹事の時は警備のパトカーが一台しかなかったのに後半の僕の時は警察の箱バス（大きいバス）が来た。その時は僕も大物になったなと思ったりました。

### 今後の大阪では

東京にいた一五年間は大変面白かったです。大阪にこんな形で帰ってくるとは想像していませんでした。大阪では東京と同じような事は出来ないかもしれませんが、何か面白いことをしたいと考えています。

主な活動として、大阪難波の実家である「居酒屋みよし」の手伝いをしながら、大阪生野教会（主任牧師・原忠和先生）のもとで勉強をさせていただこうと思っています。

今年五月は「教えられなかった戦争・中国編」のために約一ヶ月、高岩さんと一緒に中国に行って日本の敗戦後にあった共産党運動について

撮影する予定です。戦後六〇年のこの夏八月に全国上映会をしたいと考えています。

これからどうなるか分かりません。百人町教会で得られた数々の経験。韓国の教会との姉妹教会関係や様々な教会での運動、フィリピンの方々やクルドの方々とのつながりや礼拝のモチ方など、たくさん百人町教会では学ばせていただきました。僕は将来「百人町教会支部」を大阪に創れたらと考えてたりしています。

最後に今後僕は色々なことをしたいと考えています。これからも益々大変お世話になると思います。賈先生、阿蘇先生はじめ、百人町教会の方々のご健康と神様の恵みをお祈りしています。

いろいろありがとうございました。ですが、今後とも何卒宜しくお願いします。



2005年3月6日証詞の時の小林明氏

## 魚住決定

百田 ローズマリー

一九九八年秋のこと、男性からの女性への性転換願望を持つ、ある性同一性障害の患者が東京家庭裁判所八王子支部に続柄記載の訂正を申し立てた。「彼女」は既に海外で性別適合手術を受けており、社会的にも女性として生活していた。日本で最初に埼玉医科大学の公的な医療監督下において「性別適合手術」が行われたのが、同じ年の十月一六日であったから、その申立は、その直前のことであった。一審却下の審判が下ったのが、翌年一九九九年八月九日であった。その当事者は直ちに即時抗告を行い、審理の場は東京高等裁判所の第五民事部に移された。二〇〇〇年二月九日、その特別抗告もやはり却下されたが、その決定の最後には、以下の文章が付加されていた。少し長いが一文であり、引用することにしよう。

「なお、付言するに、性同一性障害に苦しみ、いわゆる性転換手術を受けてまでも生来の生物学的性とは別の性の下で生きざるを真剣に望む者が相当数いることは否定できない事実であり、医学界においても、その治療及び診断のガイドラインを作成、公表するなどの動きのあることは、前記認定のとおりである。しかし、いわゆる性転換手術については、それが性同一性障害の治療方法として社会一般の承認を得るに至っているかといえ、現段階ではこれを肯定することを躊躇せざるを得ず、社会的なコンセンサスを得るためにはなお十分な議論を要する

実情にあるといわざるを得ないし、性別の変更を肯定するとしても、単に戸籍法の分野のみならず、関連する法令の適用上種々の重大な問題を惹起し、社会生活全般に極めて大きい影響を及ぼすことが予想されるのであって、その解決のためには、幅広い視点に立って問題点を洗い出し、社会生活に及ぼす影響の程度や将来の社会のあり方等についても慎重な検討が加えられる必要がある、戸籍訂正の可否やその手続に關しても、これらの作業の一環として解決が図られるべきものというべきであって、結局のところ、立法に委ねられるべきものと考えられる。」

この重要な決定は裁判長裁判官であった、魚住庸夫氏の名を冠して、通称「魚住決定」と呼ばれている。

この決定が判例時報一七一八号(二〇〇〇・十・一)に掲載されると、この決定を批判する法学論文がそれこそ、「雨後の竹の子」のように発表された。それらは概ねこの決定を批判する内容であった。実際、その後と同様の申立を行った性同一性障害の当事者たちは、概ねこの決定の名の下に申立を棄却されていた。一方、立法の場では、この高裁決定を受けて特に自民党内部で南野知恵子参院議員(現法相)を中心として、勉強会が開催されることになった。この勉強会は一時期中断されたが、二〇〇二年冬には再開され、その翌年までに当事者や有識者を交えて、合計六回の勉強会が開催された。

この決定がある以上、性同一性障害の当事者が性別の自己決定権や幸福追求権を盾に、申立

を行っても、司法としては却下せざるを得ない状況になっていたため、立法による救済が必要と判断されたのである。

南野知恵子参院議員の政治力だけでは到底不可能と思われたが、当時の与党であった、自民党・公明党・保守党は与党プロジェクトチームを編成して法案の策定に当たった。参院先議で議論され、衆院でも全会一致でこの法律は百五六通常国会で成立した。「性同一性障害者の性別の取扱いの特例に関する法律」(G I D特例法)の成立日は二〇〇三年七月十日、官報に公示されたのは七月十六日であった。法案策定から成立まであつという間のことであった。これにより一定の要件を満たした性同一性障害者は戸籍上の性別を変更することが可能となったのである。

しかし、この特例法には欠陥もあつた。特に第三条第三項に「現に子がいないこと。」という一文があつた。これにより既に子供をもうけてしまった当事者が性別を変更することはできないのである。当事者団体は与党P Tの骨子案が発表された直後から、この要件の撤廃を求めたが、当事者不在のパワーポリティクスにより、その願いは届かなかつた。

附則の2には、三年を別途として要件の見直し条項が盛り込まれたが、不完全なその法律は一年後の二〇〇四年七月一六日に施行された。

なお、最後になったが、魚住決定の当事者は二〇〇四年一月二日にこの法律に則つて、その法的な性別を男性から女性に変更した。

## 宗教者と民衆の反原発運動

長田 浩昭(浄土真宗大谷派僧侶)

韓国の西海岸に位置する扶安(フアン)を訪ねた。ソウルから高速道路で穀倉地帯を両側に見ながら南に三時間、扶安インターを抜けると、まるで景色の違う広大な平地が広がる。七十年代に朴政権が行った干拓地だという。しかも、前方に見える小高い山は以前、島であったという。今では完全な陸続きである。車を止めて、汗だくになりながら頂上に歩いてたどり着くと、三六〇度のパノラマの世界が広がった。確かに、車で走ってきた地域が干拓地であることがよく分かる。ところが、驚くのはまだ早かった。その反対側に広がる世界最大の干潟を、全長三三キロという世界最長の防潮堤で海水を堰き止め干拓地にするという。これがセマングム干拓事業だ。想像を絶するほど、過去の干拓地と全く規模が違う。

扶安住民の闘いは、このセマングム干拓事業の反対運動から始まる。最も印象的な闘いは、三〇九キロのソウルまでの道のりを「三步一揮」で進む行進だ。六五日間で十五万人が参加したという。そして、先頭を歩むのは神父、僧侶、牧師、円仏教の教務である。そこには、宗教を超えた共感と、多くの民衆の賛同がある。その先頭に立つムン・ギュヒョン神父は語った。「三步は原子力が象徴する人間の欲望(貪・瞋・痴)であり、それは作る側だけではなく我々の中にもあり、その意味では共犯者である。だからこそ一揮は、すべてのいのちに礼拝し、いのちの

声を聞く。そこから宗教を超えた連帯が生まれたのです」。しかし、扶安住民による闘いは、これでは終わらなかった。

山頂で、その防潮堤の先に薄らと見える島影が、核廃棄物処分場の計画が打ち出された蟬島(ウイド)だという。そのことによって、扶安の運動は核処分場反対運動へと展開していった。政府は人口二十万人にすぎない町に警察官八千人余りを常駐させ、拘束者四一人・負傷者六百人という地元民に対する鎮圧を行った。その闘いの先頭に立ったのが同様に、ムン神父たちであり、その住民を警察権力から守ったのが彼の教会であった。宗教が、民衆の闘いの先頭であり、そして砦となつていことに感動すると同時に、我々の日常が問われていった。

この反対運動は、一二〇日間毎日平均三千人が参加した反対集会、千五百人以上の子供たちによる四一日間の登校拒否等に発展していく。そして昨年二月、自主住民投票によって圧倒的な勝利を収め、十一月には核処分場問題の勝利宣言を行った。ムン神父は「本当の勝利は、核処分場をどこにもつくらせないこと。そのことによって、エネルギー政策を変えなければならなくなるだろう。だから、扶安の闘いはひとつの希望だ。」と語った。

その一方、核廃棄物処分場の候補地・蟬島は、七割の人々が賛成に回っているという。その中で反対する、住民の一人に出会えた。彼が語った内容は衝撃だった。蟬島は豊かな漁場に恵まれながら、生活が成り立たなくなるほど、その

漁場はもうすでに大きな被害を受けてしまっていること。その原因が対岸にある、セマングムの干拓と、その南に位置する霊光(ヨンクアン)原発にあること。そして、どちらからも漁業補償を受ける範囲外の距離にあること。だから、蟬島の住民は核廃棄物処分場に賛成しているのではなく、補償金をもらって島を捨てようとしているという現実を語った。闘う根拠が蟬島の住民から、もうすでに奪われていることにショックを受けた。扶安の闘いの勝利は、果たして蟬島の住民にとつての希望となりえるのだろうか。非常に重い問いを投げかけられた思いがした。そんな中でも、蟬島と扶安との連帯への小さな光を感じたのは、「被害を受けている者の痛みを癒すのではなく、痛みを利用して踏みこむ」という、国の現実に反対せざるを得なかった」という彼の核処分場に反対する理由であった。その彼は、蟬島の漁場に大きな被害をもたらした霊光へはまだ行つたことがないという。

彼と共に、霊光原発に向かった。原発を背にして防風林の向こう側に島影を見つけると、指さして彼が言う、「蟬島だ！あれが蟬島だ」と。その時彼の眼に、自分の島はどう映っていたのだろうか。指さす彼のすぐ脇には、林立する六基の原発から、海水より七度も高く、一秒間に四八〇トンもの温排水が流れ出していた。

今回の旅で、扶安の運動の姿に大きな感動をしたと同時に、今後の運動の課題も感じた。それは、韓国だけの出来事ではなく、もちろん六ヶ所村を抱える私たちの課題でもある。

## 図書紹介

## 『不思議の国からの訪問者II』

赤尾泰子・C. カッチャブオティ著

ドメス出版

書名にある「不思議の国」とはどこかな、と思いきや、おなじみのイタリア。日本人はその観光・料理・ファッションなどには憧れるが、そこに住む人にはさほど関心をもたない。だからあらためて知ってみればイタリア人はやっぱり「不思議」でしょうか。

本書はエピソード中心のイタリア論であるが、意図は日伊比較文化論である。イタリア人との共著であるが、内容の各章節は無記名。項目と内容から察するに、異文化を背負った二人の対話と議論はかなり白熱したことでしよう。イタリア在住のご子息による表紙と挿し絵は産直の筆致がさえます。

「まえがき」が抜群です。イタリア人は日本人の無口を不思議がる。通勤電車内の静寂さ。乗客は「お互いの存在を完全に無視」して黙りこくる。そのとおりです。日本では見知らぬ人に話しかけるのはエチケット違反、話しかけてもシカトされるのが落ち。

本文は多彩なエピソードの百花繚乱で、読んでいただくよりほかありませんが、要点めいたものを見つけてまとめてみます。

「私の妻はまるで知らない人だ」の章から。イタリア在住の日本人妻が転勤で来日し、しばらくしてイタリア人の夫もあとを追って来日し、再会したときの印象、「私の妻はまるで知らない

人だ」。再会した妻はもうイタリア人でなくて、すっかり日本人になってしまっていた。日本人は自分のアイデンティティを保つことなく、自在に変化（へんげ）する、というわけ。そのとおりです。日本人は人や状況や場に自分をあわせる習性がありますが、多くの外国人はそれを自己喪失と恐れます。

「イタリアは人権の国」。個人の事情が職務遂行より先。市民は役所でささいな用件でも数時間またされる。商店のレジ係りは客そつちのけで雑談にふける。受刑者も人並みに外出自由。受刑者の人権は治安維持より大切なのでしよう。

「女性らしさを壊滅させる陰謀」ほか。イタリア人の会話は軽やかで、ジョークや風刺や口論がとびかう。この点が日本は決定的に違う。沈着冷静・真面目・几帳面・謹厳・実直が美德で、軽口の冗談や自慢や弁明や理屈っぽさの類は、はしたないとみなされる。

「あの人とはちよつとね」。おしゃべりや風刺は政治にも向けられ、新聞雑誌テレビの政治風刺に人気があつまる。政治は日常会話の対象で、学校やバスのなかでも政治談議に花がさく。こちらの国はどうでしょう。話が政治におよんだ瞬間、緊張がはしって座がしらける。家庭も学校も社会も、話題は政治から遠ざかる。日本は不思議の国。

「私の判定」 イタリアの役人と店員はもつと仕事に励んでいいのです。

日本人はもつと政治についておしゃべりしていいのです。（長島 弘江）

## ろばのせなか

復活節を前にお届けする今年度最後の『ろば』はこの時期にふさわしい衷宣恵さんの詩で始まります。開店二周年になる彼女の店・韓国料理店「まな」での出会いの中から生まれた詩ですが、重い扉を開けた魚住決定の当事者の長い闘いの間もその隣に；、そして昨年の復活節礼拝は共にしながらこの一年の間に神の許に召された方々があることに思いが行きます。「原子力行政を問ひ直す宗教者の会」の韓国交流ツアーに参加された長田氏に、韓国での厳しい現実を伝えていただきましたが、日本ではもつと深刻なのではないでしょうか。不要な便利さに安住する今の生活を見直すべき時です。（古野明美）

年度の変わり目に、「私はどこを後にし、どこへ行くのか」と考えることは、哲学ではなく、現実問題です。きつと、今いる共同体と、今後どんな付き合いをするのだろうか、と考えたりするからでしょう。しかしそれを支配しようとする権力が使うシステムに「神話」というものがある。賈先生は指摘します。一度、長島さん紹介の本を読んで、「日本人とは何か」を問い直してみたい気分です。小林明さんは百人町教会のご自身の歩みを振り返って書いてくださいました。大阪での新しい活動に祝福がありますように。それにしても十五年間一緒だった人がいなくなるというのはいへんな事で、教会内は今も何となく淋しさが漂っている感じです。

読者の皆様、今年度も『ろば』を可愛がってください、ありがとうございます。（小林祥人）